



子牛の寒冷対策

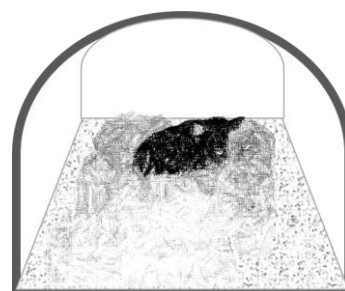
猛暑が終わり、日に日に寒くなってきました。秋～冬季間は寒冷や1日の寒暖差が大きくなり、子牛の下痢や肺炎などが増えやすい季節です。暖かい時期よりもきめ細やかな飼養管理で、寒冷対策に取り組みましょう。

1 体温低下を防ぐ

子牛は脂肪の蓄積が少なく、体温を維持する能力が低いため、寒さは大敵です。牛体に直接風が当たる、濡れた体が乾く、冷たい物のそばにいる・触れる時に熱が奪われます。

直接、牛体に風が当たらないようにする、敷料をこまめに交換し体を濡らさない、敷料を多く入れ腹を冷やさないようにすることが大切です。

新生子牛の濡れた体を早く乾燥させるために、子牛加温器(カーフウォーマー)を活用することは有効です。ただし、長時間入れると脱水症状になる可能性があるため、定期的に子牛の状態を確認しましょう。



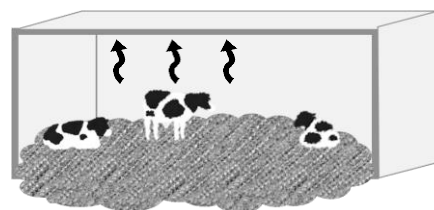
- ・すきま風を当てない
- ・体を濡らさない
- ・腹を冷やさない

2 換気と保温

保温に力を入れると換気が悪くなりがちです。換気の悪い牛舎では、糞尿から発生したアンモニアなどが充満し、気管などの粘膜を傷め、肺炎などの原因となります。冬も天気のいい日中は風下側の扉やカーテンを開けるなど、意識的に換気を行いましょう。

温かい空気は上に逃げます。ペンで飼っている場合は、上部にフタをする、屋根が高い育成舎などは赤外線ヒーターを設置する、一部に小屋根をつけるなどの事例があるので参考にしましょう。

この他に、カーフジャケットやネックウォーマーの着用、カーフハッチ内で湯たんぽを使用することにより保温効果が期待できます。



温かい空気が上に逃げない工夫を！

3 代用乳給与

気温が下がると体温の維持に多くのエネルギーを使うため、夏に比べ増体量が減ります。増体が悪いと感じた時は、哺乳量やスターター給与量を増やしましょう。

スターターを多く食べるためには水の給与が必要です。冬季間はぬるま湯を飲ませることをおすすめします。水をがぶ飲みするおそれがある場合は代用乳給与後30分程度経過してから給与しましょう。

表 給水の効果 (kg/4週間)

	水	
	自由摂取	なし
増体量	8.45	5.26
スターター摂取量	11.7	8.1
下痢日数 (日/頭)	4.5	5.4

(生産獣医療システム乳牛編1 一部改変、1999)